

令和 6 年 6 月 16 日現在

機関番号：32404

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2023

課題番号：21K20016

研究課題名(和文)日本語の束縛理論に関する体系的な言語データ調査と理論構築

研究課題名(英文)A theoretical analysis of binding and related expressions in Japanese

研究代表者

辰己 雄太(Tatsumi, Yuta)

明海大学・外国語学部・講師

研究者番号：30906681

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文):本研究では、照応関係を持つことができる日本語の言語表現について調査を行った。特に、従来の束縛理論を見直すために、照応に関連する様々な言語表現を調査対象に含めた。具体的には、(i)「そんなに」の否定極性表現としての用法と束縛代名詞に関する性質、(ii)「そう」などの代用形の性質、(iii)複数の指示対象が存在する場合の交差現象、(iv)数量表現の照応用法などについて、それぞれ詳細な調査を行なった。これらのトピックは、従来の束縛理論の枠組みではあまり議論されていないが、照応関係を持ち得る言語表現を多角的な観点から分析することで、照応という言語現象の新しい側面を明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

照応関係を持つ言語表現は、ヒトの言語に広く一般的に観察されている。本研究では、日本語における様々な照応表現に着目し、その性質について詳細な分析を行った。この研究を通して得られた成果は、他の言語との比較を行うことで、今後さらに通言語的な研究に発展することが期待される。また、日本語を母語としない研究者にも理解できる形で、日本語の照応表現について詳細な分析結果をまとめたことにより、海外の研究者が、日本語の照応表現を比較対照研究のテーマに選びやすくなるという学術的な意義も期待される。

研究成果の概要(英文):This study investigated anaphoric expressions in Japanese. I examined various types of anaphoric expressions to review the nature of the binding theory. Research topics include (i) the use of "sonnani" as a negative polarity item and its relation to bound pronouns, (ii) properties of the preform "soo," (iii) crossover phenomena in the presence of multiple antecedents, and (iv) the anaphoric use of measure phrases. These topics have not received much attention in the literature. The present study, however, aimed to contribute to the understanding of the nature of anaphoric expressions by analyzing them from different angles.

研究分野：言語学

キーワード：照応表現 代用形 代名詞 交差現象

## 1. 研究開始当初の背景

生成文法の枠組みでは、束縛理論と呼ばれる理論のもと、照応表現や代名詞などの指示対象を持つ名詞表現について、その指示対象を決定するためのメカニズムが分析されてきた。これらの名詞表現は、言語の階層構造についての証拠を提供することから、統語的なテストとしても広く使用されている。また、名詞の指示対象を決定するためのメカニズムは、ヒトの言語システムを理解するうえでも重要であり、関連する名詞表現の性質を調査することで、ヒトが持つ言語能力の一般的な性質が理解できる可能性がある。このため、束縛理論に関連する言語表現は、現在でも理論言語学の中で、大きな研究テーマになっている。

しかし近年では、複数の言語において束縛理論が検討された結果、関連する名詞表現を使った統語的なテストのいくつかに関して、母語話者の容認性判断の揺れが存在することが指摘されている。また言語によって、照応表現や代名詞などの名詞表現の分類に、細かな違いが存在していることが、明らかになっている。このような学術的背景を踏まえ、本研究は、日本語における照応表現や代名詞について、より幅広く質の高い言語データを収集し、それらの言語表現について、既存の理論的分析を見直すことを目指した。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、代名詞やその他の代用形を含めた、照応関係を持つことができる名詞表現の性質を調査し、生成文法の枠組みにおいて提案されている束縛理論のシステムを再検討することである。特に、これまで既存の研究で検討されてきた照応表現の言語データだけでなく、先行研究ではあまり取り上げられてこなかった名詞表現も調査対象に含め、新たに文献調査や質問調査などを行い、収集したデータを体系的にまとめることを目指した。理論言語学の中でも、特に生成文法の分野では、いくつかの限られた言語データをもとに、理論を構築する手法が取られてきた。異なる種類の照応表現を調査し、多角的に照応という言語現象を調査する本研究の手法は、束縛理論に関連する言語表現について、新たな見識を与えることが期待される。

## 3. 研究の方法

本研究では主に文献調査や面談質問調査(対面、及びオンライン)を用いて、照応関係を持つことができる名詞表現の性質を分析した。照応表現に関する言語データを質問調査で集める際には、名詞の指示対象に関する、専門的な容認性判断が必要となる。このため、本研究の質問調査では、アメリカのコネチカット大学の言語学を専攻している大学院生や若手研究者など、専門的な知識を持つ母語話者から、言語表現の容認性判断に関するデータを収集した。本研究では主に照応関係を持つ日本語の言語表現について調査を行ったが、データの収集に関しては、日本語以外の言語についても言語データを集めた。

また、質問調査に加えて、既存の論文や出版物についての文献研究も行った。この際、英語で執筆された論文や出版物の他に、日本語学や国語学の文献なども対象とし、網羅的に調査を行った。生成文法の分野では、日本語学や国語学で蓄積されてきた膨大な知見を、積極的に取り扱った研究がまだ多くはない。本研究では、日本語学や国語学の文献についても調査し、関連する言語データを体系的に整理した。

## 4. 研究成果

本研究では、照応関係を持つことができる日本語の言語表現について調査を行った。特に、従来の束縛理論を見直すために、照応に関連する様々な言語表現を調査対象に含めた。具体的には(i)「そんなに」の否定極性表現としての用法と束縛代名詞に関する性質、(ii)「そう」などの代用形の性質、(iii)複数の指示対象が存在する場合の交差現象、(iv)数量表現の照応用法について、それぞれ調査を行なった。以下では、それぞれの研究トピックについての研究成果を説明する。

### (i) 「そんなに」の否定極性表現としての用法と束縛代名詞に関する性質

指示表現を含む「そんなに」の否定極性表現としての用法を調査し、「その」や「それ」などの、束縛代名詞として解釈できる指示表現のみが、否定極性表現として使用できることを指摘した。また同様のパターンは、英語の"all that"のような指示表現を含む構文にも観察されることを踏まえ、指示表現が束縛され得るかどうかがという性質と、その指示表現が否定極性表現として使用可能であるかがどうか、通言語的に相関している可能性を示唆した。この研究成果をもとに国際学会で口頭発表を行い、国内外の研究者から専門的なコメントなどを得ることができた。

(ii) 「そう」などの代用形の性質

日本語の述部や命題を先行詞として選択する代用形「そう」の性質について調査を行った。まず「みたい」や「よう」などの助動詞と共起する「そう」と省略現象の分布を詳細に調査し、この代用表現が、異なる構成素を先行詞として選択していると主張した。具体的には、助動詞「みたい」が補部に Tense Phrase を選択するのに対し、「よう」は Finite Phrase を選択しているという分析を提案した。この分析は、証拠性を表現する助動詞の中で、「みたい」よりも「よう」の方が、構造上より大きな構成素を選択することを示している。助動詞と共起する「そう」の性質については、理論的な先行研究があまりなく、この現象についての詳細な分析を進めた点が、この研究の新規性である。

また、動詞句を先行詞とする場合の代用形「そう」と省略の分布についても、詳細な分析を行った。顕在的な代用形と省略の使用条件を精査することで、重複表現を避ける際に使用されるこれらの表現が、それぞれに異なる役割を持っていることを明らかにした。具体的には、先行詞として解釈される動詞句の中に、主要部としての動詞が残っているか残っていないかが、代用形と省略の使用条件を決めていると主張した。

(iii) 複数の指示対象が存在する場合の交差現象

照応表現はその指示対象を決める際に、別の表現の指示対象に依存するという性質が備わっているが、指示対象を持つ言語表現が文中に複数現れた場合、それらの表現と照応表現の語順に関して、制約があることが知られている。そのような制約の一つである交差現象に関して、本研究では、複数形の代名詞が関わる例文を調査し、新たな分析を提案した。具体的には、近年の生成文法理論ではその存在が棄却されている指標の概念を再検討し、指標についての意味的な条件を仮定することで、日本語の交差現象に関する言語表現の容認性判断が、正しく説明できると主張した。また、本研究の成果を踏まえ、指標を用いた束縛理論の意義についても議論を行った。

(iv) 数量表現の照応用法

日本語の類別詞を含む数量表現の照応用法について、先行研究の内容を踏まえ、新たに理論的な分析を行った。まず、日本語における数量表現の照応用法について、その使用条件を明らかにした。その後、問題となる照応用法と同じ性質を示す構文を、オランダ語、ハンガリー語、アイルランド語、中国語、マルタ語、スペイン語などで調査した。複数の言語を日本語と比較することで、問題となる照応用法が、通言語的に共通して持っている性質を明らかにした。

具体的な分析としては、日本語を含む複数の言語において、照応用法の場合には、数量表現が発音されない名詞を修飾していると主張した。また、照応用法の意味は、その発音されない名詞と、それに付随する代名詞から生じているという分析を提案した。発音されない名詞表現の証拠として、数量表現に本来接続しない接辞が、照応用法の場合には現れることを、複数の言語のデータをもとに示した。数量表現の照応用法については、通言語的な調査がこれまであまり進んでおらず、その点において、本研究は学術的な重要性を持っている。

上記(i)、(ii)、(iii)、(iv)のような、照応関係を持つことができる様々な言語表現を詳細に分析することで、本研究では、照応という言語現象の本質を多角的に再検討した。今後の研究では、この研究成果を踏まえ、束縛理論に代表されるような、照応についてのより一般的な言語システムを、さらに明らかにしていく予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Otani, Shuki and Yuta Tatsumi	4. 巻 13
2. 論文標題 Light nouns and extraction from null clausal arguments	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Proceedings of Generative Linguistics in the Old World in Asia	6. 最初と最後の頁 211 - 224
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Akimoto, Takayuki and Yuta Tatsumi	4. 巻 165
2. 論文標題 The Size of Clausal Complements of -mitai and -yoo in Japanese	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Proceedings of the Linguistic Society of Japan	6. 最初と最後の頁 131 - 137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yagi, Yusuke and Yuta Tatsumi	4. 巻 30
2. 論文標題 Crossover Effects with Set indices: Evidence from Japanese Scrambling	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Japanese/Korean Linguistics	6. 最初と最後の頁 577 - 586
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tatsumi, Yuta	4. 巻 3
2. 論文標題 Anaphoric interpretations of the nominal use of Japanese classifier phrases	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 NELS 53: Proceedings of the Fifty-Third Annual Meeting of the North East Linguistic Society	6. 最初と最後の頁 149 - 162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 Yuta Tatsumi
2. 発表標題 Anaphoric interpretations of the nominal use of Japanese classifier phrases
3. 学会等名 The Fifty-Third Annual Meeting of the North East Linguistic Society (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Tommy Tsz-Ming Lee and Yuta Tatsumi
2. 発表標題 The division of labor in Japanese clausal and predicate ellipsis
3. 学会等名 The Workshop on Theoretical East Asian Linguistics 13 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yagi, Yusuke and Yuta Tatsumi
2. 発表標題 Crossover Effects with Set indices: Evidence from Japanese Scrambling
3. 学会等名 The 30th Japanese/Korean Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Otani, Shuki and Yuta Tatsumi
2. 発表標題 Light nouns and extraction from null clausal arguments
3. 学会等名 Generative Linguistics in the Old World in Asia XIII (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Akimoto, Takayuki and Yuta Tatsumi
2. 発表標題 The Size of Clausal Complements of -mitai and -yoo in Japanese
3. 学会等名 日本語学会第165回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yuta Tatsumi
2. 発表標題 Negative polarity and the silent MUCH in degree demonstratives
3. 学会等名 Theoretical Linguistics at Keio Semantic Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------